

千日尼御返事

弘安三年七月二日 五九歳

こう入道殿の尼ごせんの事、なげき入つて候。又こいしこいしと申しつたへさせ給へ。
鷲目がもく一貫いちくわん五百文ごひゃくもん・のりのり・わかめわかめ・ほしいほしい、しなじなしなじなの物給たび候たひ了おわんぬ。法華經ほっけの御宝前ごぼうぜんに申まし上げて候。法華經ほっけに云いはく「若し法ほを聞きく者ひと有あらば一ひととして成な仏ぶつせざること無し」云云。文字は十字にて候へども法華經を一句よみまいらせ候へども、釈迦如来の一代聖教をのこりなく読むにて候なるぞ。故に妙樂大師云はく「若し法華を弘むるには凡そ一義を消するも皆一代を混じて其の始末を窮めよ」等云云。始と申すは華嚴經、末と申すは涅槃經。華嚴經と申すは仏最初成道の時、法慧・功德林等の大菩薩、解脱月菩薩と申す菩薩の請に趣いて仏前にてとかれて候。其の經は天竺・竜宮城・兜率天等は知らず、日本国にわたりて候は六十卷・八十卷・四十卷候。末と申すは大涅槃經、此も月氏・竜宮等は知らず、我が朝には四十卷・三十六卷・六卷・二卷等なり。此より外の阿含經・方等經・般若經等は五千・七千余卷なり。此等の經々は見ずきかず候へども、但法華經の一字一句よみ候へば、彼々の經々を一字もをとさずよむにて候なるぞ。譬へば月氏・日本と申すは二字、二字に五天竺・十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量の粟散国の大地・大山・草木・人畜等をさまれるがごとし。譬へば鏡はわづかに一寸・二寸・三寸・四寸・五寸と候へども、一尺・五尺の人をもうかべ、一丈・二丈・十丈・百丈の大山をもうつすがごとし。

されば此の經文をよみて見候へば、此の經を開きく人は一人も欠かけず仏になると申す文なり。九界・六道の一切衆生各々心々かわれり。譬へば二人・三人・乃至百千人候へども一尺の面の内じちににたる人一人もなし。心の似にざるゆへに面も似にず。まして二人・十人、六道・九界の衆生の心いかんがかわりて候らむ。されば花をあいし、月をあいし、すきをこのみ、にがきをこのみ、ちいさきをあいし、大なるをあいし、いろいろなり。善をこのみ、悪をこのみ、しなじななり。かくのごとくいろいろに候へども、法華經に入りぬれば唯一人の身、一人の心なり。譬へば衆河の大海に入りて同一鹹味なるがごとく、衆鳥の須弥山に近づきて一色なるがごとし。提婆が三逆と羅睺羅が二百五十戒と同じく仏になりぬ。妙莊嚴王の邪見と舍利弗が正見と同じく授記をかをほれり。此即ち無一不成仏のゆへぞかし。四十余年の内の阿弥陀經等には舍利弗が七日の百万反大善根ととかれしかども、未顕真実ときらわれしかば七日ゆをわかして大海になげたるがごとし。み提希が觀經をよみて無生忍を得しかども、正直捨方便とすてられしかば法華經を信ぜずば返りて本の女人なり。大善も用ふる事なし。法華經に値はずばなにかせん。大悪もなげく事なかれ、一乗を修行せば提婆が跡をもつぎなん。此等は皆無一不成仏の經文のむなしからざるゆへぞかし。

されば故阿仏房の聖靈は今いつくむにかをはすらんと人は疑ふとも、法華經の明鏡をもって其の影をうかべて候へば、靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むきにを

はすと日蓮は見まいらせて候。若し此の事虚事そらごとにて候わば、日蓮がひがめにては候はず、釈迦如来の「世尊せそんほうくご法久後、要当説ようとうせつしんじつ真実」の御舌と、多宝仏の「妙法華經かいぜしんじつ、皆是真実」の舌相と、四百万億那由他の国土にあさのごとく、いねのごとく、星のごとく、竹のごとく簇簇とすきもなく列なりゐてをはしまし、諸仏如来の、一仏もかけ給はず広長舌を大梵王宮だいぼんのうぐうに指し付けてをはせし御舌どもの、くちらの死にてくされたるがごとく、いやしのよりあつまりてくされたるがごとく、皆一時にくちくされて、十方世界の諸仏如来大妄語の罪隨にとされて、寂光の浄土こんの金なる大地、はたとわれて、提婆がごとく無間大城むけんにかぼと入り、法蓮香比丘尼がごとく身より大妄語の猛火じつぼうけおうぱといでて、実報華王の花のその一時に灰じんの地となるべし。いかでかさる事は候べき。故阿仏房一人を寂光の浄土に入れ給はずば諸仏は大苦おに墮ち給ふべし。たゞをいて物を見よ物を見よ。仏のまこと・そら事は此にて見奉るべし。

さては、をとこははしらのごとし、女はなかわのごとし。をとこは足のごとし、女人は身のごとし。をとこは羽のごとし、女はみ身のごとし。羽とみとべちべちになりなば、なにをもってかとおべき。はしら柱たうれなばなかは地倒に墮ちなん。いへにをとこなければ人のたまし魂みなきがごとし。くうじをばたれにかい公事誰言みあわせん。よき物をばたれにかやしなうべき。一日二日たがいしをだにもをぼつかなしとをもしに、こぞの三月の廿一日にわかれにしが、こぞもま去年ちくらす去年どもみゆる事なし。今年もすでに七つきになりぬ。たといわれこそ来たらずとも、いかに音信をとづれはなかるらん。ちりし花も又さきぬ。をちし菓このみも又なりぬ。春の風もかわらず、秋のけしきもこぞのごとし。いかにこの一事のみかわりゆきて、本のごとくなかるらむ。月は入りて又いでぬ。雲はきへて又来たる。この人の出でてかへらぬ事こそ天もうらめしく、地もなげかしく候へとこそをぼすらめ。いそぎいそぎ法華經を糎料らうれうとたのみまいらせ給ひて、りやうぜん浄土へまいらせ給ひて、みまいらせさせ給ふべし。

抑そもそも子はかたきと申す経文もあり。「世人子の為に衆もろもろの罪を造る」の文なり。鵬くまたか・鷲わしと申すとりはをやは慈悲をもって養へば子はかへりて食とす。梟きょうちよう鳥と申すとりは生まれては必ず母をくらう。畜生かくのごとし。人の中にも、はるり王は心もゆかぬ父の位を奪ひ取る。阿闍世王は父を殺せり。安禄山は養母をころし、安慶緒と申す人は父の安禄山を殺す。安慶緒は子の史思明ししめいに殺されぬ。史思明は史朝義しちようぎと申す子に又ころされぬ。此は敵かたきと申すもことわりなり。善星比丘と申すは教主釈尊の御子なり。苦得外道げどうをかたらいて度々父の仏を殺し奉らんとす。又子は財たからと申す経文もはんべり。所以に経文に云はく「其の男女追つて福を修するを以て大光明有りて地獄を照らし其の父母に信心おを發こさしむ」等云云。設ひ仏説ならずとも眼の前に見えて候。

天竺てんじくに安足国王あんそくこくおうと申せし大王はあまりに馬をこのみてかいしほどに、後にはかいなれて鈍馬どんめを竜馬りゅうめとなすのみならず牛を馬ともなす。結句は人を馬となして乗のり給ひき。其の国の人あまりになげきしかば、知らぬ国の人を馬となす。他国の商人ゆきたりしかば薬をかいて馬となして御まやにつなぎつけぬ。なにとなけれども我が国はこいしき上、

妻子ことにこいしく、しのびがたかりしかども、ゆるす事なかりしかばかへる事なし。
又かへりたりとも、このすがたにては由なかるべし。たゞ朝夕にはなげきのみしてあり
し程に、一人ありし子、父のまちどきすぎしかば、人にや殺されたるらむ、又病にや沈
むらむ。子の身としていかでか父をたづねざるべきといでたちければ、母なげくらく、
男も他国にてかへらず、一人の子もすてゝゆきなば、我いかんがせんとなげきしかども、
子ちゝのあまりにこいしかりしかば安足国へ尋ねゆきぬ。ある小家にやどりて候ひしか
ば家の主申すやう、あらふびんや、わどのはをさなき物なり。而もみめかたち人にすぐ
れたり。我に一人の子ありしが他国にゆきてしにやしけん、又いかにてやあるらむ。我
が子の事ををもへば、わどのをみてめもあてられず。いかにと申せば、此の国は大なる
なげき有り。此の国の大王あまり馬をこのませ給ひて不思議の薬を用ひ給へり。一葉せば
き草をくわすれば、人、馬となる。葉の広き草をくわすれば、馬、人となる。近くも他
国の商人の有りしを、この草をくわせて馬となして、第一のみまやに秘蔵してつながれ
たりと申す。此の男これをきいて、さては我が父は馬と成りてけりとをもひて返って問
うて云はく、其の馬は毛はいかにとといければ、家の主答へて云はく、栗毛なる馬の肩
白くぶちたりと申す。此の物此の事をきゝて、とかうはからいて王宮に近づき、葉の広
き草をぬすみとりて、我が父の馬になりたりしに食はせしかば本のごとく人となりぬ。
其の国の大王不思議なるをもひをなして、孝養の者なりとて父を子にあづけ、其れより
ついに人を馬となす事とゞめられぬ。子ならずばいかでか尋ねゆくべき。目連尊者は母
の餓鬼の苦をすくい、浄蔵・浄眼は父の邪見をひるがえす。此よき子の親の財となる
ゆへぞかし。

而るに故阿仏聖霊は日本国北海の島のいびすのみなりしかども、後生ををそれて出家
して後生を願ひしが、流人日蓮に値ひて法華経を持ち、去年の春仏になりぬ。尸陀山の
野干は仏法に値ひて、生をいと死を願ひて帝釈と生まれたり。阿仏上人は濁世の身
を厭ひて仏になり給ひぬ。其の子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華経の行者となり
て、去年は七月二日、父の舍利を頸に懸け、一千里の山海を経て甲州波木井身延山に登
りて法華経の道場に此をおさめ、今年は又七月一日身延山に登りて慈父のはかを拝見す。
子にすぎたる財なし、子にすぎたる財なし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

七月二日

日蓮花押

故阿仏房尼御前御返事

追申

絹の染め袷袋一つまいらせ候。豊後房に申さるべし。既に法門日本国にひろまりて候。
北陸道をば豊後房なびくべきに学生ならでは叶ふべからず。九月十五日巳前にいそぎい
そぎまいるべし。

かずの聖教をば日記のごとくたんば房にいそぎいそぎつかわすべし。山伏房をばこれよ
り申すにしたがいて、これへはわたすべし。山伏ふびんにあたられ候事悦び入って候。